The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シンポジウム報道記事（毎日新聞・朝日新聞・読売新聞）
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 141-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シンポジウム報道記事（毎日新聞・朝日新聞・読売新聞）

毎日新聞夕刊「文化／批評と表現」欄

一九九三年九月三十日（木）

21世紀の儒教の意義を考える

日本中国学会大会

日本中国学会（伊藤漱平会長）四五回大会が二十五、二十六日、大阪府吹田市の市文化会館で開かれた。中国関係では日本で最大の学会で、約五百人が参加、研究発表に耳を傾けたが、今回は「専門領域からの脱出を」と会員外の島田虔次・京都大名誉教授、作家の陳舜臣氏、佐藤慎一・東大教授を招いてシンポジウムを開いた。

テーマは「儒教と二十一世紀と」。「最近、経済発展している東アジアの国々が中国を含め、そろって、儒教を文化の土壌にしている。欧米の研究者が儒教を見直す動きを見せ、その流れが強くなっている。いったい、儒教は二十一世紀にも東アジアで価値を持ち続けるのだろうか。また、儒教はさまざまなアスペクト（側面）をもっているが、儒教とは何か」という問題意識から設定された。

島田氏は「思想としての儒教の積極的意義を擁護したい。それは、結局、天下という、政治の問題にどう対処するかという問題になる」と、訴えた。また陳氏は、血統と出身地を背景にした、礼節の問題を具体的な場面に即して語りながら、「儒教の批判精神、あるいは抗議精神を発掘すべきだ。日本は受験儒教の弊害から免れ、より広い世界を見ることができたし、二十一世紀の儒学は『儒』という枠をはずして、ひろい世界に、自由な思考を向けることになる。最終的には、世の中に責任を持つという倫理が一番重要な概念として、残るのではないか」と語っていた。会場からの質問も相次いだが、最近の経済発展を支えるパワーと儒教との関連などには、触れずじまいだった。

朝日新聞夕刊「文化／点描」欄

一九九三年十月一日（金）

「忠」突出の日本儒教
特異さが浮き彫りに

大阪でシンポ

停滞の思想の代表格だった儒教が改めて注目されたのは、世界的に経済の停滞が見られだした一九八〇年代以降、儒教文化を共有する東アジアの国々が大きく発展したことがきっかけだった。日本中国学会主催のシンポジウム「儒教と二十一世紀と」がこのほど、大阪府吹田市内で開かれ、島田虔次・京大名誉教授と作家の陳舜臣氏が、近年の儒教評価の潮流を視界に入れつつ基調報告をした。論議を通して日本儒教の特異性が浮かびあがる形となった。

島田氏は「私は儒教を擁護する」と明言し、一般に考えられているイメージとは異なる儒教像を、十七世紀、明末清初の学者・黄宗羲の著作を通して説明した。例えば「太学（首都の別格の大学）の学長には時の最高の学者を任命し、その地位は宰相と同じとする。天子は毎月一日、学生の席に列して学長の講義を聴く。学長は政治の欠点を直言する」という彼の大学論に、上質な儒教本来の思想があるとした。

さらに島田氏は、日本の儒学では武士的な忠・孝が重視され、江戸時代には「忠とは主君が愛しくて愛しくてたまらない、恋愛のようなものにまでなった」と指摘し、理屈抜きで主君に命をささげるような世界と、黄宗羲の大学論とを比べるべきだと述べた。

陳舜臣氏も「忠が突出した日本儒教は中国と違う。中国では儒教は『公』にかかわることであり、『個』にかかわるのは仏教・道教と思う」と述べ、さらに「中国では姓・出身地を同じくする血縁家族の団結が固く、そこから激しい相互の闘争も起こるが、国家の観念は今も薄い」と、個人的色彩の濃い忠が国家と絡み合う日本の特異性を示唆した。

最後に司会の河田悌一・関西大教授が「儒教が二十一世紀に期待されるものがあるとすれば何か」と質問した。陳氏は「儒教の精神はこの世に責任をもつ点にこそある。支配の道具となった体制内儒教以前の姿に

戻れば素晴らしい資源となる」。島田氏は「この世に責任をもつとは、結局は政治になる。政治のあり方を考え続けることに、儒教の使命がある」と述べた。

また、ゲストの佐藤慎一・東京大教授は「平和・人権・活力のある二十一世紀の達成へ、個々人で考えるしかない。その場合、どのような儒教像を描いても自由だが、上からの押しつけがあってはならない」、井波律子・金沢大教授は「人と人との関係の中に文化がある。関係性を権力的に固定させる力として儒教があるなら、アナクロニズムというしかない。権力性を除去できれば、高度な関係性のテクニックを生かし、有効性を発揮できるかもしれない」と語った。

読売新聞夕刊「文化／無題」欄

一九九三年十月九日（土）

体制への批判息づく儒教

現代的な意義探るシンポ

儒教といえば孔子、孔子といえば『論語』。人間と言行録そのものの魅力は別にして、儒教とは堅苦しい道徳的修養や倫理の源泉であり、封建社会の人間関係を固定化するイデオロギーという印象が、いまだに根強いのではないか。

「過去の遺物」と批判はされても、新鮮な刺激を受けたり共感されることの少ない儒教について、その現代的意義や未来への可能性を探るシンポジウムが、大阪府吹田市で開催された日本中国学会の一企画として行われた。なかでも島田虔次氏（京都大学名誉教授）と、陳舜臣氏（作家）の講演は、儒教に対する古臭い先入観を覆す発見に満ちたものだった。

島田氏は、思想としての儒教を朱子学から陽明学のラインで考えたとき、特筆すべきは「学ぶこと」をめぐる「学校」のありかたであると指摘した。

宋代以後の中国では、在野の読書人によるインフォーマルな教育集団・政治集団が多く作られた。私立の学校としての「書院」である。「中国のルソー」とさ

れる黄宗羲の『明夷待訪録』は在野の「清議」の正当性を主張し、それが政治機構に制度化されるべきことを述べ、学校の決定権を「君主権」に優越するものと位置づけた。士大夫（官僚、インテリ）階級という限定はあるものの、そこに「人民主権の原則」を見ることができる。

黄宗羲によると、人君（君主）とは、本来エゴイストである人間の社会にあって、公の利益の追求という、割にあわぬ仕事を買って出た人物。「天下が主で人君は客」すなわち君主や臣下が仕えるのは天下万民のためという「人民主権」の考え方が基本にある。

陳舜臣氏も言う。国教となり体制に組み入れられる以前の儒教には、積極的に政治に参加し、君主に仕えるには「これを犯せ」と助言した孔子の「抗議精神」あるいは体制への「批判精神」が、みずみずしく息づいていたのだと。だからこそ儒教は永らく反体制とみなされ、「焚書坑儒」の弾圧をうけたのである。後世の「書院」も、朝廷と対立した。

その長い歴史と伝統から見ると、儒教は決して一枚岩ではないことがわかる。〈儒教と21世紀と〉というやや無理なシンポジウムのテーマが、素直に納得できた一日だった。（英）

〔日本中国学会第四十五回大会準備会委員名簿〕

福島吉彦　深澤一幸　坂内千里　南　昌宏
河田悌一　岸田知子　吉永慎二郎　串田久治　塩出　雅　大形　徹　鵜飼尚代　湯浅邦弘
滝野邦雄　佐藤一好　竹田健二　寺門日出男　杉山一也　藤居岳人　湯城吉信　矢羽野隆男
神林裕子　田中佳哉　釜田啓市　古賀芳枝　辰巳　聰　中野三朝　藤井久美子　李　文英